

3 データによる分析と考察

(1) 左右・起終点地区の分類

北海道には 2000 年時点で 34 市ある。そのうち 28 市について、中心市街地における「主たる人の流れ」の起点と方向について、歴史的経緯を踏まえて記述した。それを基準として、左右地区あるいは起終点地区を区画した。ここでの目的は、歓楽街が「主たる人の流れ」のどの方向に位置するかである。その指標として、店舗数が多いスナックの立地が目安になる。それと同時に、商業・サービス業店舗について、どの業種がどの地区にどの程度分布しているかも把握したい。

街が発展する過程では、歓楽街の立地は移動することがありうる。しかし、街が成熟してくると、歓楽街はその場所に留まり続けることが通常である。1970 年代頃から大型店が出現してきた。大型店は車社会を反映し、国道沿いや郊外という中心市街地ではない場所に立地するようになった。それにより、中心市街地の商店街は衰退し、シャッター街という現象が見られるようになった。しかし、歓楽街が大型店とともに移動したということはない。歓楽街の規模に影響があっても、立地場所が変わることは、ほとんど見られない。

左右地区あるいは起終点地区の位置と範囲を具体的に決めるのに、タウンページ・データを用いた。そこには店舗の業種と住所が記載されているので、店舗が密集している範囲を絞り、左右地区・起終点地区を決めた。地区は複雑な形ではなく、できるだけ単純な形で求めた。

表 3-1 では、どの都市が左右地区・起終点地区に分類されるかを示している。帯広は繁華街とそれ以外に分類し、留萌は右・左・駅周辺の 3 分類にしている。函館と室蘭は各 2 地域あるので、計 30 市街地になる。左右地区に分類されるのは 23 市街地、起終点地区は 5 市街地、その他 2 市街地である。

表 3-1 中心市街地が左右地区か起終点地区かの分類

左右分類			起終点分類	その他
札幌	岩見沢	滝川	函館駅周辺	帯広
函館本町	美唄	砂川	網走	留萌
小樽	芦別	深川	苫小牧	
旭川	江別(野幌)	富良野	稚内	
室蘭	紋別	登別(幌別)	士別	
東室蘭	名寄	恵庭		
釧路	根室	伊達		
北見	千歳			

左右地区分類以外の 7 都市について、歴史的経緯を振り返ってみよう。

1) 函館駅周辺。西部地区が最初に発展し、ついで西部地区と中央部地区の境界に位置する十字街が繁華街になった。その左手方向に歓楽街が出現し、その奥に大森遊郭ができた。

中央部地区に函館駅が開設され、そこを起点に主たる人の流れができて、駅周辺の大門地区には歓楽街的要素が残った。人の流れの先には遊郭があったので、その周辺地域が歓楽街になった。したがって、起終点地区の分類にした。

2) 帯広。当初、帯広駅は石狩通沿いに設置されると想定されていた。想定された駅位置からみて、左手方向にある大通沿いに商業サービス業店舗が立地するようになった。ところが駅が設置されたのは、石狩通から南 1.55km 離れたところであった。設置された駅からみて、今までの商業サービス業店舗の立地は右手方向にあたる。一般の商業店舗は駅前通である西 2 条通周辺にも立地するようになったが、歓楽街的業種は移動しにくく、時間をかけて、少しだけ駅前通方向に移動した。

3) 網走。藤野家宅があった南 4 条東 6 丁目を起点に、西に向かって街を発展させていった。中央道路を越えた先に、当時は 8 丁目と呼ばれた西 2 丁目に歓楽街ができた。網走駅は、市街地の西端からさらに 500m 先に開設された。それゆえ、西 2 丁目の歓楽街を分けて、商店街が延びていった。したがって、当初から起終点地区の分類になる。

4) 留萌。最初に市街地ができたのは留萌川河口の北側に位置する元町であった。1891 年の新市街地造成計画に基づき、河口南側の本町を貫く南大通を中心に市街地が造られていった。留萌駅は 1910 年に開業したが、留萌川北側の原野であった。その後、留萌川の切替工事・副港造成・市街地整備が行われた。留萌川は駅北側を流れるようになり、駅は南大通と地続きになった。歓楽街は南大通の左手にある錦町・開運町に立地するようになり、駅周辺には別の商店街ができた。

5) 苫小牧。苫小牧橋周辺の札幌街道沿いに市街地ができ、海岸とは反対側の左手地区に遊郭が出現した。苫小牧橋より 1km ほど東に苫小牧駅が開設され、その近くに王子製紙工場が立地するようになった。王子製紙の発展とともに、苫小牧橋より 400m 東の新川通に中心が移ってきた。大火があり、当時の市街地の大半が焼失した。復興過程で、遊郭を海岸近くに移転させ、市街地の中心はさらに東の大町に移った。大町の東隣にある錦町にも飲食店が立地するようになった。第二次大戦後、駅前にヤミ市ができ、錦町入口にはデパートが開店した。主たる人の流れは、駅を起点に錦町的一条通を進む方向に変化した。主たる人の流れが歴史的な経緯とは逆方向になったので、左右地区という分類では把握できなくなった。

6) 稚内。最初に市街地ができたのは北浜通沿いであった。現在の稚内駅近くに波止場があり、北浜通に直交する波止場通を機軸に店舗が立地するようになった。日露戦争の結果、南樺太を領有し、稚内はその中継地となった。海岸の埋立や北防波堤の造成で工事関係者の出入りも多かった。1922年に当時の稚内駅が現在の稚内駅の南1.2kmのところに開業した。翌年、稚泊航路が開設され、乗客は南の稚内駅から北防波堤まで移動して乗船するようになった。当時の主たる人の流れは、北浜通を南から北に進む方向である。北浜通には一般商店や旅館が、その左手にある仲通には料理飲食店が、さらに左手の本通・山下通には若干の高級料亭が立地していた。第二次大戦後、南樺太はソ連領となり、中継地の

役割は終わった。現在は、北浜通で駅前通より南に「中央商店街」が、駅前通を北に越えた左側に並行する仲通に歓楽街がある。したがって、起終点地区に分類する。ここでの「北浜通」は、初代北浜通を指している。

7) 士別。主たる人の流れは、駅前通―大通―中央通である。1970年代頃までは、飲食店は大通の西側に分布していた。すなわち、主たる人の流れの左地区に立地していた。しかしその後、大通の東側で中央通をまたいで歓楽街ができた。したがって、起終点地区の分類にした。

以上の記述から、網走では当初から起終点地区の分類、留萌は左右地区に駅周辺地区の分類である。残り 5 都市では、歴史的経過の途中で歓楽街が主たる人の流れの左手に立地することがあった。士別を除く 4 都市では、その後の状況変化で人の流れが変わったが、歓楽街の位置は変わらず、左右地区という分類にはならなかった。

(2) タウンページ・データ

対象地域について、2000 年時点のタウンページ・データを商業・サービス業に関連して収集した。表 3-2 は業種一覧と店舗数である。

データ・スクリーニングについて、手順を簡単に記述する。対象地域を少し広くとり、データを収集した。同一電話番号は 1 件にまとめた。同一住所で同一名称は 1 件にまとめた。1 件にまとめるとき、複数業種が記載されているが、店舗数が多い業種に格付けした。調査対象地区を限定し、該当する店舗を抽出した。対象となった店舗数は 24,159 店である。そのうちスナックは 7,334 店で、全体の 30%である。

左右・起終点地区の相違が明確になるように、タウンページの業種をグループ化した。したがって、標準産業分類とはグループ化が異なっている。表 3-3 はグループ名と店舗数である。グループの内訳は表 3-2 のグループ番号に対応している。

表 3-2 タウンページの業種別店舗数

番号	グループ番号	業種	店舗数
1	1	デパート	66
2	2	スーパーストア・マーケット	80
3		コンビニエンスストア	95
4		ディスカウントショップ	19
5	3	銀行	167
6		信用金庫	67
7		信用組合	20
8		労働金庫	13
9	4	生命保険	183
10		損害保険	155
11	5	ホテル	161
12		ビジネスホテル	26
13		旅館	143
14		旅館(温泉旅館)	2
15	6a	ブティック	299
16		洋品店(紳士洋品)	45
17		洋品店(婦人洋品)	69
18		洋服店(子供服)	32
19		洋服店(紳士服)	67
20		洋服店(婦人服)	329
21	6b	フォーマルウェア	6
22		貸衣裳	40
23		衣料品店	226
24		洋裁店	43
25		洋品店	101
26		洋服店	20
27		洋服店(学生服)	6
28		洋服店(注文服)	65
29		衣料品店(制服・作業服)	22
30		ジーンズショップ	10
31	7	呉服店	194
32		和装小物	3
33		履物	18
34		染物・洗い張り	2
35	8a	下着販売店	49
36		かばん袋物店	35
37		ハンドバッグ店	21
38		アクセサリー	41
39	8b	ネクタイ	2
40		靴下	7
41		靴店	162
42		靴材料	2
43		靴修理	6
44		靴製造・卸	1
45		手袋	1
46		寝具店	57
47		旅行用品店	9
48		スポーツ用品店	97
49	9	旗	1
50		手芸店	47
51		工芸品	8
52		人形(日本人形)	1
53		裁縫材料店	3
54		喫煙具	4
55		生花店	169
56		釣具店	27
57		ペットショップ	19
58		ペットショップ(犬ねこ)	7
59		ペットショップ(魚)	5
60		ペットホテル	2

番号	グループ番号	業種	店舗数
61	10	カメラ店	116
62		時計店	155
63		めがね店	158
64		宝石・貴金属店	97
65		宝石・貴金属加工卸	10
66	11	みやげ品	72
67		民芸品	6
68		海産物	201
69	12	旅行業	24
70		旅館・ホテル・民宿予約センター	17
71		旅行業・旅行代理店	184
72	13	映画館	39
73		カラオケボックス・喫茶	86
74		ゲームセンター	53
75		パチンコ店	124
76		ビリヤード	15
77		ボウリング場	12
78	14	CD・ビデオ・レコード店	74
79		CD・ビデオ・レコード店(中古)	13
80		ゲームソフト販売店	5
81		レンタルビデオ	35
82		おもちゃ店	62
83	15	美容院	741
84		理容店	336
85		エステティックサロン	130
86		銭湯	29
87		サウナぶろ	14
88	16	クリーニング	165
89		クリーニング(しみ抜き)	4
90		ふとん丸洗い	1
91		ハウスクリーニング	9
92		コインランドリー洗たく機械(業務用)	127
93	17	装粧品卸	1
94		装粧品店	2
95		化粧品販売	274
96		薬局	254
97		薬店	71
98		漢方薬・薬草	9
99		美容院用品商	3
100		たばこ	37
101	18	日用品雑貨店	57
102		文具・事務用品店	81
103		書店	98
104	19	電器店	130
105		電気機械器具販売	45
106		電器店(修理)	19
107	20	自動車販売(総合)	26
108		自動車販売(大型車)	1
109		自動車販売(外車)	3
110		中古車販売	13
111		自動車部品・用品店	12
112	21	菓子店	190
113		菓子店(洋菓子)	62
114		菓子店(和菓子)	8
115		菓子店(あめ類)	3
116		菓子店(せんべい)	2
117		パン店	41
118		パン製造業	19
119		食肉店	79
120		果実店	15
121		鮮魚店	137

番号	グループ番号	業種	店舗数
122	21	鮮魚店(活魚)	1
123		かまぼこ	6
124		乾物店	2
125		豆腐	19
126		食料品店	102
127		酒店	177
128		米店	82
129		弁当・仕出し	42
130		弁当(持ち帰り)	30
131		弁当(折詰弁当)	4
132		すし店(持ち帰り)	7
133	22	レストラン(ファミリーレストラン)	31
134		ファストフード	76
135		ビアホール	15
136		喫茶店	745
137		喫茶店(コーヒー専門店)	48
138		カレーハウス	20
139		スバゲティ店	9
140	23	うどん・そば店(スタンド)	5
141		うどん・そば店	214
142		ラーメン店	338
143		ぎょうざ・焼売店	9
144		食堂	287
145		とんかつ店	24
146	24	フランス料理店	9
147		イタリア料理店	33
148		ピザハウス	12
149		レストラン	207
150		懷石料理店	10
151		割烹・料亭	48
152		日本料理店	215
153		すし店	520
154		うなぎ料理店	11
155		てんぷら料理店	25
156		ふぐ料理店	4
157		魚料理店	7
158		しゃぶしゃぶ料理店	14
159		おでん料理店	29
160		中華料理店	64
161		中国料理店	27
162		レストラン(韓国料理)	3
163		レストラン(朝鮮料理)	1
164		レストラン(各国料理)	21
165		ステーキハウス	17
166		小料理店	49
167		お茶漬・おにぎり店	7
168	25	お好み焼・たこ焼店	45
169		居酒屋	1,234
170		焼肉・ホルモン料理店	225
171		飲食店	1,701
172		焼鳥店	277
173		ろばた焼	99
174	26	スナック	7,334
175	27	バー・クラブ	546
176		パブ・ビストロ	453
177		キャバレー	119
178	28	個室付浴場	53
179		個室マッサージ	45
180	29	ホテル(ラブホテル)	18
181		ホテル(モーテル)	1
計			24,159

表 3-3 業種グループの店舗数

グループ番号	業種グループ	店舗数
1	デパート	66
2	スーパー・コンビニ・ディスカウント	194
3	銀行	267
4	保険	338
5	ホテル・旅館	332
6	洋服店	1,380
7	和服店	217
8	衣類付属物店	490
9	趣味の店	293
10	カメラ時計貴金属店	536
11	土産・海産物店	279
12	旅行業	225
13	娯楽業	329
14	CD・ゲーム・おもちゃ店	189
15	美容・リフレッシュ業	1,250
16	クリーニング業	306
17	化粧品・薬局店	651
18	日用雑貨・文具・書店	236
19	電気店	194
20	自動車販売店	55
21	食料品販売店	1,028
22	明るい食事の店	944
23	気軽な食事の店	877
24	敷居の高い料理店	1,333
25	酒をともなう飲食店	3,581
26	スナック	7,334
27	バー・クラブ・キャバレー	1,118
28	ソープランド	98
29	ラブホテル	19
計		24,159

(3) 歓楽街の立地位置

歓楽街は主に飲食店から構成されている。表 3-4 は、グループ番号 22～27 を取りあげ、市街地別・左右地区別／起終点地区別に店舗数を示している。「その他の店」は上記以外の店舗の合計である。ソープランドとラブホテルは、中心市街地では歓楽街に立地していると考えられるが、特定の都市に立地し店舗数も少ないので、その他の店に含めた。

表 3-4 の「スナック」を左右地区・起終点地区でみれば、ほとんど多くの店舗が左地区か終点地区に立地していることがわかる。「バー・クラブ・キャバレー」の店舗数も、それに準じる。ちなみに左右地区分類の市街地合計で、スナックが左地区に立地しているのは 6,029 店舗のうち 97.4% である。スナックは左地区にほぼすべてが立地している。歓楽街を構成する「酒をともなう飲食店」では 79.7% が左地区に立地している。起終点地区を無視すれば、「歓楽街は主たる人の流れの左方向に立地している」と言える。本書の主張はこの

点にある。あとは、データを詳細に検討していきたい。

表 3-4 歓楽街を構成する店舗数：市街地別／左右地区別・起終点地区別

市街地名 (都市の集中 地区人口順)	明るい食事 の店		気軽な食事 の店		敷居の高い 料理店		酒をともなう飲 食店		スナック		バー・クラブ・ キャバレー		その他の店		計		合計	都市の 集中地区 人口
	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左		
札幌	179	70	72	100	108	342	132	910	0	1,816	2	424	1,274	517	1,767	4,179	5,946	1,759,684
旭川	81	21	59	29	43	71	92	238	0	514	4	90	604	123	883	1,086	1,969	329,670
函館本町	15	7	7	7	30	38	40	103	34	360	10	46	160	61	296	622	918	260,357
釧路	27	11	21	17	12	38	16	212	0	488	2	57	297	71	375	894	1,269	176,971
小樽	51	13	21	31	24	89	52	200	9	474	4	34	384	164	545	1,005	1,550	131,246
野幌(江別)	8	0	8	2	7	2	14	26	27	55	1	6	77	20	142	111	253	108,536
北見	21	16	11	16	4	51	15	89	1	343	0	45	224	93	276	653	929	86,991
室蘭	16	18	12	10	5	12	9	52	3	129	1	8	88	105	134	334	468	85,251
東室蘭	22	5	15	9	12	9	45	42	6	228	3	24	191	24	294	341	635	85,251
千歳	14	7	10	15	12	26	19	90	5	280	4	29	125	77	189	524	713	72,908
岩見沢	18	16	17	10	10	17	49	85	7	170	3	17	271	112	375	427	802	57,685
恵庭	4	2	6	8	6	11	11	33	6	109	1	11	84	18	118	192	310	56,262
幌別(登別)	3	5	1	9	2	10	2	21	4	45	1	2	62	23	75	115	190	41,274
滝川	18	3	18	7	7	14	29	56	6	124	1	13	230	10	309	227	536	34,442
留萌 (駅周辺)	9	3	2	13	3	17	7	42	7	137	0	9	110	65	138	286	517	23,006
	5		8		3		1		0		0		76		93			
名寄	7	14	5	13	4	11	3	47	0	97	0	15	111	106	130	303	433	21,142
伊達	9	5	10	3	5	5	13	26	7	59	2	4	121	34	167	136	303	21,129
紋別	9	2	3	5	3	11	8	42	0	120	0	7	120	24	143	211	354	19,746
根室	1	4	6	6	5	7	8	19	15	77	5	7	65	58	105	178	283	19,579
富良野	12	4	7	8	12	1	11	29	8	33	0	3	116	33	166	111	277	14,466
美唄	8	2	8	6	6	5	18	25	0	66	1	6	132	20	173	130	303	13,614
深川	11	8	9	5	6	6	20	30	6	50	0	4	149	38	201	141	342	12,720
砂川	5	4	4	3	3	7	6	27	3	61	0	4	90	23	111	129	240	10,968
芦別	8	2	8	4	5	8	9	26	5	35	1	5	83	23	119	103	222	10,129
計	561	242	348	336	337	808	629	2,470	159	5,870	46	870	5,244	1,842	7,324	12,438	19,762	3,453,027
起終点市街地	起点	終点	起点	終点	起点	終点	起点	終点	起点	終点	起点	終点	起点	終点	起点	終点	合計	集中地区人口
函館駅周辺	21	14	45	23	22	30	22	81	14	210	7	20	464	120	595	498	1,093	260,357
苫小牧	9	4	6	10	4	20	10	116	4	293	2	56	178	85	213	584	797	141,089
稚内	9	8	8	11	3	11	2	27	1	78	1	5	98	43	122	183	305	35,818
網走	10	5	11	9	9	17	13	43	1	121	0	18	158	53	202	266	468	31,315
士別	8	1	7	9	2	11	11	30	17	53	2	8	121	7	168	119	287	13,595
計	57	32	77	62	40	89	58	297	37	755	12	107	1,019	308	1,300	1,650	2,950	482,174
帯広	繁華街	それ以外	繁華街	それ以外	繁華街	それ以外	繁華街	それ以外	繁華街	それ以外	繁華街	それ以外	繁華街	それ以外	繁華街	それ以外	合計	集中地区人口
	24	28	30	24	45	14	88	39	436	77	76	7	316	243	1,015	432	1,447	161,127
全市街地	944		877		1,333		3,581		7,334		1,118		8,972		24,159		3,750,720	

表 3-5 から、各市街地のスナック店舗数のうち、右・起点地区に 10%以上立地している市街地を列挙しよう。野幌(33%)・伊達(11%)・根室(16%)・富良野(20%)・深川(11%)・芦別(13%)・士別(24%)である。野幌のある江別市を除いて、集中地区人口が 1～2 万人の小都市である。ただし、小都市でも名寄・紋別・美唄では、スナックはすべて左地区に立地している。歓楽街の規模が小さいので、右地区に少しでも散在すると、右地区の割合が大きくなると推測できる。

集中地区人口が大きい都市では、スナックが右・起点地区に立地する比率は 10%以下で、店舗は 10 店未満である。これを超えるのは表 3-4 から、函館駅周辺(14 店)・函館本町(34 店)・野幌(27 店)・根室(15 店)・士別(17 店)である。

函館駅周辺と士別では、かつて左地区であった地域が右地区あるいは起点地区に変更になったからと考えられる。函館本町では、市電が五稜郭公園前で右折する地域の左右区画

割りが明確でないことが挙げられる。野幌では、8丁目通が国道12号線に交差する手前右側にスナックが立地し、終点地区の性格をもつ。そこを右地区にしているからである。根室では、歓楽街を形成していた昔の弥生町が衰退し、歓楽街的要素が右地区に少し持ち込まれたと考えられる。

以上の検討結果を踏まえて、「歓楽街は主たる人の流れの左方向に立地している」と再度確認することができる。

表 3-5 各項目の店舗数のうち右地区・起点地区に立地する店舗数の割合(%)

市街地名 (都市の集中 地区人口順)	明るい 食事の店	気軽な 食事の店	敷居の高 い料理店	酒をともな う飲食店	スナック	バー・クラブ・ キャバレー	その他の 店
	右	右	右	右	右	右	右
札幌	72	42	24	13	0	0	71
旭川	79	67	38	28	0	4	83
函館本町	68	50	44	28	9	18	72
釧路	71	55	24	7	0	3	81
小樽	80	40	21	21	2	11	70
野幌(江別)	100	80	78	35	33	14	79
北見	57	41	7	14	0	0	71
室蘭	47	55	29	15	2	11	46
東室蘭	81	63	57	52	3	11	89
千歳	67	40	32	17	2	12	62
岩見沢	53	63	37	37	4	15	71
恵庭	67	43	35	25	5	8	82
幌別(登別)	38	10	17	9	8	33	73
滝川	86	72	33	34	5	7	96
留萌	82	43	26	16	5	0	74
名寄	33	28	27	6	0	0	51
伊達	64	77	50	33	11	33	78
紋別	82	38	21	16	0	0	83
根室	20	50	42	30	16	42	53
富良野	75	47	92	28	20	0	78
美唄	80	57	55	42	0	14	87
深川	58	64	50	40	11	0	80
砂川	56	57	30	18	5	0	80
芦別	80	67	38	26	13	17	78
起終点地区	起点	起点	起点	起点	起点	起点	起点
函館駅周辺	60	66	42	21	6	26	79
苫小牧	69	38	17	8	1	3	68
稚内	53	42	21	7	1	17	70
網走	67	55	35	23	1	0	75
士別	89	44	15	27	24	20	95
帯広	繁華街	繁華街	繁華街	繁華街	繁華街	繁華街	繁華街
	46	56	76	69	85	92	57

平均	66.7	51.5	35.8	23.3	6.4	11.0	75.0
標準誤差	3.3	2.8	3.4	2.2	1.5	2.1	2.1

(注)留萌の右地区割合には、駅周辺を含む。平均の対象は、帯広を除く29市街地である。

集中地区人口が多くなるに従って、スナック店舗数も多くなると推測できる。そのことを回帰分析で検証してみよう。函館と室蘭は 2 地域に分かれているが、スナック店舗数を各 1 つにまとめる。江別・登別は各 2 市街地のうち 1 つしか扱っていないので除外する。計 26 都市について計算した。

大都市になるほど客を効率的に集められるので、スナック店舗数は集中地区人口の増加率より少なくてもよい。したがって、両変数の対数を取り回帰した。結果は曲線で表示している。

$$\text{スナック店舗数} = 0.056 \times (\text{集中地区人口})^{0.74}$$

$$\text{自由度修正決定係数} = 0.92$$

残差分析も適切

以上の結果から、集中地区人口が 1% 増加すると、スナック店舗数は 0.74% 増加すると言える。この計算式は、残差分析の結果から計算のための前提条件を満たしていること、その説明力は、うまく説明できたケースを 1 とすると、0.92 程度で説明できていることを表している。

ここで、0.74 で表されているものを「弾力性」という。すなわち、基準となる変数の変化率と、比較される変数の変化率との「比」を意味している。

(4) 飲食店の分布

近年の地方都市では、歓楽街を構成する主な業種はスナックである。東京・大阪などの歓楽街、北海道では札幌の歓楽街ではスナック店舗数は多いが、目立つのは居酒屋・カラオケ・ゲームセンター・クラブ・バーなど、あるいは呼び込みの店である。本書では北海道の地方都市を扱っているので、スナックを主として、4 分類した飲食店との関連でみよう。飲食店の 4 分類とは、「明るい食事の店」・「気軽な食事の店」・「敷居の高い料理店」・「酒をとまなう飲食店」である。

図 3-1 スナックと飲食 4 分類合計店舗数の散布図

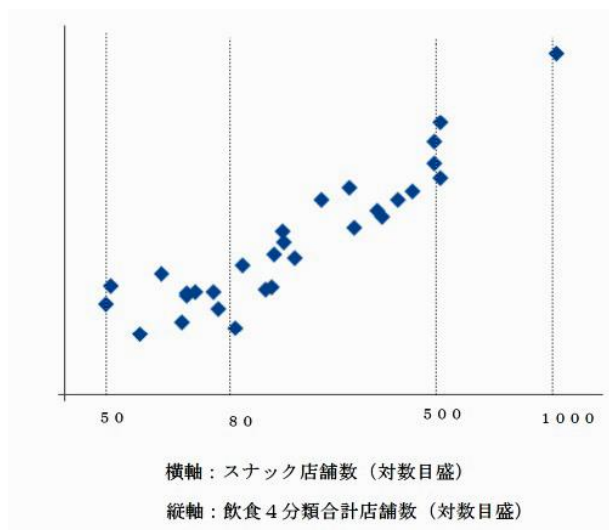


図 3-1 では、スナック店舗数を横軸（対数目盛）に、飲食店 4 分類の合計店舗数を縦軸（対数目盛）にして散布図を描いている。

図 3-1 をみると、スナック店舗数が 80 以上では右上がりの直線関係に、80 未満では横軸に平行に分布しているようにみえる。以下の記述を簡単に表記するために、80 以上を「A 市街地」、80 未満を「B 市街地」と呼ぶことにする。おおよそ、A 市街地は集中地区人口が 5 万人以上都市の市街地に対応する。

21 個の A 市街地データで、両変数の対数を取り回帰した結果は

$$\text{飲食店舗数} = 0.836 \times (\text{スナック店舗数})^{1.00}$$

$$\text{自由度修正決定係数} = 0.92$$

残差分析も適切

9 個の B 市街地データで、両変数の対数を取り回帰した結果は

$$\text{飲食店舗数} = 49.9 \times (\text{スナック店舗数})^{0.096}$$

$$\text{自由度修正決定係数} = -0.12$$

この結果から言えることは、A 市街地では弾力性が 1.00 である。すなわち、スナック店舗数が 1% 増加すると、飲食店 4 分類の合計店舗数も 1% 増加する。それは一方が原因で他方が結果であるという因果関係を意味するものではない。スナックと飲食関係の店舗数が多くなれば、両者の店舗数は同じ比率で増加することを意味する。

B 市街地では両変数の相関はない。スナックと飲食店 4 分類の店舗数が少ないときには、その関係はバラバラである。ここではスナック店舗数が 80 を基準にしたが、それは調査対象地区を狭くとした結果である。対象地区を広くとれば、基準は 80 以上になるであろう。

さらに飲食店 4 分類を分けて、スナックに回帰した。A 市街地のデータでは、スナック

と「酒をともなう飲食店」での結果は、弾力性が 1.02、自由度修正決定係数は 0.89 であった。スナックと「酒をともなう飲食店」以外の 3 分類計とは、弾力性が 0.98、自由度修正決定係数は 0.82 であった。飲食店 4 分類を細分化すれば、それぞれのデータ数が少なくなるので、説明力も低下する。しかし、弾力性は 1.00 前後である。したがって、飲食店の各分類の店舗数の変化率は、スナックの店舗数の変化率とほぼ同じである。

(5) 右・起点地区に立地する業種

表 3-6 では、中心市街地を 3 分類している。集中地区人口が 5 万人以上都市で左右地区分類の市街地（5 万人以上市街地）、5 万人未満都市で左右地区分類の市街地（5 万人未満市街地）、起終点地区分類の市街地（起終点市街地）である。3 分類した市街地の各項目の店舗数と、そのうち右地区・起点地区に立地している店舗数の割合(%)を表示している。ただし、帯広は除いて計算している。さらに特徴がみられる項目については、内訳を記載した。

デパートは 3 分類すべてにおいて 9 割以上が右・起点地区に立地している。その意味で、デパートは街の表の顔と言える。また、普通銀行は 5 万人未満市街地の右地区に 97%、起終点市街地の起点地区に 97%に立地しており、表の顔である。5 万人以上市街地でも右地区に 80%立地しているので、表の顔となっている。スーパーは起終点市街地では起点地区に 92%立地する。コンビニ・ディスカウントショップは、5 万人未満市街地では右地区に 93%立地する。

中心市街地が起終点地区で構成される場合、終点地区には場末感がある。それゆえ、表の顔としての店舗は終点地区には立地しにくい。左右地区で構成される市街地では、左地区に場末感がないこともあるので、表の顔の店舗も立地しうる。ただし、5 万人未満市街地では歓楽街が小さいので、左地区の範囲も狭くなる。したがって、表の顔としての店舗は左地区に立地する余地が少ない。5 万人以上市街地では左地区も広くなるので、表の顔の店舗も立地する可能性は多くなる。

明治から昭和初期にかけて歓楽街を構成する業種は、遊郭・料亭・演芸が多かった。それゆえ場末感ではなく、華やかさ・粋さ・高級感があつた。和の伝統的な業種は、歓楽街の近くに立地することも多かった。昭和初期になるとカフェが出現し、映画館が賑わった。しかし第二次大戦後にテレビが普及すると、映画館の賑わいは下火になった。それにつれて歓楽街では、スナックと居酒屋が主になってきた。とくに地方都市ではその傾向がみられる。スナックと居酒屋では、人々は安らぎ・くつろぎを求める。そこには奥まった感じがあり、場末感も出てくる。

ホテル・旅館について。高級ホテルは表の顔であり、右・起点地区に立地する。それに対し、旅館は和の雰囲気があり、左・終点地区の立地が少し多くなる。通常のホテルは 5 万人未満市街地では右地区に、起終点市街地では起点地区での立地が多い。5 万人以上市街地では左地区に少し多い。

洋服店について。婦人子供服・紳士服専門店は高級感が必要なので、右地区に立地する。

とくに場末感がある終点地区での立地はなく、起点地区に立地する。和服店は、5 万人以上市街地では昔からの歓楽街の影響で、左地区での立地が少し多い。

食料品販売店について。市街地にまんべんなく立地することが通常である。右・起点地区の方が広いので、そこに 7 割前後が立地している。そのうち洋菓子・パン店については、洋風の華やかさもあり、右・起点地区での立地が多い。

スナックおよび飲食店 4 分類の店舗が右・起点地区に立地する割合は、5 万人以上市街地の場合、スナックは 5%である。「明るい食事の店」70%、「気軽な食事の店」53%、「敷居の高い料理店」36%、「酒をともなう飲食店」24%である。5 万人未満市街地・起終点市街地でも、状況はほぼ同じである。逆に、左地区・終点地区に立地する見方言えば、ほとんどのスナックがそこに立地している。また、「酒をともなう飲食店」・「敷居の高い料理店」は左地区・終点地区に多く立地している。これらの業種が歓楽街を主に構成していると言える。

表 3-6 市街地分類別／右地区・起点地区に立地する店舗数の割合 (%)

グループ 番号	業種グループ	店舗数					右地区・起点地区に立地 する店舗数の割合(%)		
		計	5万人 以上 市街地	5万人 未満 市街地	起終点 市街地	帯広	5万人 以上 市街地	5万人 未満 市街地	起終点 市街地
1	デパート	66	42	12	9	3	93	95	93
2	スーパー・コンビニ・ディスカウント (内訳) スーパー コンビニ・ディスカウント	194	106	56	22	10	70	78	92
		80	31	36	11	2	61	74	92
		114	75	20	11	8	70	93	83
3	銀行 (内訳) 普通銀行 信金・信組・労金	267	138	72	40	17	79	91	94
		167	91	38	27	11	80	97	97
		100	47	34	13	6	73	86	85
4	保険	338	177	68	61	32	90	80	80
5	ホテル・旅館 (内訳) 上級ホテル ホテル 旅館	332	140	81	80	31	61	65	66
		67	29	8	17	13	83	80	73
		120	76	18	16	10	53	82	82
		145	35	55	47	8	56	58	55
6	洋服店 (内訳) 婦人紳士子供服専門店 その他洋服店	1,380	865	210	189	116	79	74	87
		841	545	104	116	76	83	78	94
		539	320	106	73	40	76	71	81
7	和服店	217	121	47	29	20	57	77	69
8	その他衣類付属物店 (内訳) 女性用衣類付属物店 その他衣類付属物店	490	294	107	58	31	72	72	78
		146	111	10	13	12	78	92	100
		344	183	97	45	19	70	71	74
9	趣味の店	293	152	83	45	13	75	78	80
10	カメラ時計貴金属店	536	328	115	63	30	79	77	88
11	土産・海産物店	279	96	20	157	6	68	67	87
12	旅行業	225	166	13	32	14	79	88	80
13	娯楽業	329	210	64	36	19	50	60	48
14	CD・ゲーム・おもちゃ店	189	106	46	27	10	71	74	91
15	美容・リフレッシュ業	1,250	735	313	135	67	70	74	59
16	クリーニング業	306	155	84	51	16	70	81	63
17	化粧品・薬局店	651	399	144	71	37	77	76	77
18	日用雑貨・文具・書店	236	137	55	29	15	81	81	78
19	電気店	194	100	58	24	12	79	85	77
20	自動車販売店	55	22	11	9	13	61	74	72
21	食料品販売店 (内訳) 洋菓子・パン店 その他食料品販売店	1,028	562	263	157	46	68	76	71
		103	66	15	16	6	83	75	79
		925	496	248	141	40	66	76	70
22	明るい食事の店	944	642	161	89	52	70	63	68
23	気軽な食事の店	877	513	171	139	54	53	51	49
24	敷居の高い料理店	1,333	979	166	129	59	36	40	26
25	酒をともなう飲食店	3,581	2,574	525	355	127	24	25	17
26	スナック	7,334	5,064	965	792	513	5	8	7
27	バー・クラブ・キャバレー	1,118	826	90	119	83	9	12	13
28	ソープランド	98	96	0	1	1	8	0	-
29	ラブホテル	19	17	0	2	0	28	0	-
計		24,159	15,762	4,000	2,950	1,447	37	48	45